第37回研究会の議論のまとめ①

参考資料３８－２

検討事項

○ IPv6の利用促進について、今後の取組の新たな目標設定について

（意見）
- バックエンドのIPv6化について、日本のコンテンツ事業者が遅れをとっている状況をどうすべきか。
- コンテンツ事業者としてデュアルスタックの運用は難しいのではないか。
- 過度に経済合理性を超えて、IPv6化を事業者に押し付けても、効果がないのではないか。
- ユーザサイドのIPv6化について、事業者が自助努力で対応していくべきなのか、本研究会のように公的な立場から推進していくべきなのか。

○ 今回の研究会のとりまとめの位置付けについて

（意見）
- クラウド事業者に対して、IPv6化を推進すべきであることを報告書に含めてもよいのではないか。
- IPを使用していないLPWAやIoTのサービスがあるため、IPv6化は将来的に無駄金リスクにもなり得ることを発信していく必要があるのではないか。
- いずれはIPv6で全部つながる世の中になり、IPv4を使い続けることで、将来様々な問題が生じ得ることは発信しておく必要があるのではないか。
- 本研究会として大きな節目に到達したということは出すべきではないか。
- 新たな課題も出てきており、リチャータリング（委員の構成やミッションを変えるなど）して動いていくことが、メッセージ性ややり方としてよいのではないか。

第37回研究会の議論のまとめ②

追加検討事項

○ ユーザサイドのIPv6化に資する先進事例作りについて

（意見）
- 中小の事業者など、現状うまく進んでいないところに対し、具体的にどのような手順でやると、ほかの問題も一緒に解決できるのかをベストプラクティスとして出していく必要があるのではないか。
- ユーザサイドのIPv6化については、実際検証してみないとわからないことも多く、まずどこかでモデルとして経験し、教訓集などを共有しないと進まないのではないか。
- B2Bで情報交換しているベストプラクティスを、どのようにサーキュレートし、公表していくかが重要ではないか。
- 通常なら外部に出したくない情報を、共有できる場の存在は重要ではないか。

第36回研究会の議論のまとめ

検討事項

○ 第4次報告書のフォローアップについて、IPv6の普及促進について

（意見）・法人の情報システムのIPv6対応状況について、
Sierからヒアリングすべきではないか。

○ IPv6の利用促進について、今後の取組の新たな目標設定について

（意見）・IPv4、IPv6の過渡期だけでなく長期的に考えていくべきではないか。
その中で、まずはIPv6のトラフィックの増加に向けて検討が必要ではないか。

・IPv6への移行の背景として、IPv4を使うためのコスト（1アドレスあたりの価格）が上昇していることに触れてもよいのではないか。

・IPv6対応のケーススタディが共有されていくべきではないか。

・より安心・安全な世界へ向けて、IPv6を利用することが考えられないか。

○ 今回の研究会のとりまとめの位置付けについて

（意見）・報告書において、MNOのIPv6化、ケーブルのIPv6化など今後のモデルとなるような成果を大きく取り扱うべきではないか。

第35回研究会の議論のまとめ

検討事項

○ 第4次報告書のフォローアップについて、IPv6の普及促進について

（意見）インフラのIPv6化のミッシング・ピースとして、

- 公衆Wi-FiのIPv6対応状況について、フォローすべきではないか。
- MVNOのIPv6対応状況について、フォローすべきではないか。

○ IPv6の利用促進について、今後の取組の新たな目標設定について

（意見）
- 次のターゲットをどうすべきか。
- ユーザエンドに関するIPv6化を議論する場合、どういう場やメンバーで議論することが適当であるか。

○ 今回の研究会のとりまとめの位置付けについて

（意見）
- プログレスレポートとすべきか、第5次報告書とすべきか、最終報告書とすべきか。
- 最終報告書とする場合、本研究会の位置づけをどうするか。
- 報告書において、IPv6における我が国の国際的な貢献を含めるべきではないか。
- 報告書において、大部分のインフラのIPv6化が完了したというメッセージを含めることは有益ではないか。
- 報告書において、大局的な人材育成について触れるべきではないか。